

平城宮跡才10次発掘調査終了報告

特別史跡「平城宮跡」の才10次発掘調査は、奈良市佐紀町東大宮、約120坪を実施した。調査は、昭和37年7月11日に開始し、9月末にはほぼ遺構検出とその実測、記録作業をおわり、以後埋め直しをおこなったが、農繁期となり、ため、作業を中絶し、調査完了は11月27日となった。

調査地域は、推定「才二次内裏」地区の北方西部で、昭和29年におこなわれた國宮発掘地の西端部より北にあたる。

検出遺構は、苑池1所、建物9棟、門1棟、柵1列、築地2面などである。以下その概略を説明する。

苑池SG 500は、今回の調査地域の大半を占める広大なもので、南北幅約45m、東西は未発掘地域にのみびてゐるが、発掘地域内ですべてに45mをはかる。深さ約2mの池底は、ほぼ水平に削平されている。北岸は地山を20度ほどの傾斜を掘りとり、その傾斜面上に30cm程度の玉石や礫を積み上げており、南岸は25度ほどの地山傾斜面上に厚さ50cmほど砂が堆積している。この池から南西へのびる溝SD 503は、幅約1m、深さ約18cmであるが、うちを粘土

て築きかためであたかも漏水をふせぐかのように入念に埋めており、池との接続部分には、池岸に堆積した砂がごの溝の埋没粘土上をおくっている。このことから、この溝は池の造営当時の排水溝として用いられたものと考えられる。

建物はSB 520を除いて、他はすべて掘立柱のもので、北から述べると、SB 540は南北2間、東西9間以上の東西棟建物で、柱間は西側1間が27mであるが、他は3mである。西からオ7間目の棟通り1間仕切りの小柱穴がある。SB 523は、東西2間（柱間各18m）、南北4間（両端間は21m、中央2間は15m）の南北棟建物であるが、南専柱と欠く、それに重複して検出されたSB 510は東西2間（柱間各23m）、南北3間（柱間各33m）の南北棟建物である。SB 508は、南北2間（柱間各15m）、東西3間（柱間27、36、27m）の東西棟建物である。SB 501は、東西7間、南北4間で、四面に廂がつく東西棟建物で、柱間は3m等間である。SB 502は、東西2間、南北5間（柱間各33m）の身舎の東西に36mの廂がつくもので、SB 501の西半部と重複して検出され、柱穴の重複状況から、SB 502がSB 501よりのものとしてあることがわかった。SB 498は、東西2間、南北1間以上（柱間各27m）で、SB 497は、東西1間（柱間4.8m）、南北5間以上（柱間各24m）の南北棟建物である。SB 520は、南北2間、東西3間以上（柱間各29m）の東西棟建物で、柱間23mの廂が南につくらしい。この建物では、柱穴

から根石状の玉石が検出されており、小礎石を用いたものとおもわれる。以上9棟の建物のうち、SB 540・497・498は、直接地山上に造営されているが、他の建物は、苑池SG 500を埋立てた後、その埋土の上に造営されたものであった。

築地SA 488・505は、3.3mの間隔をおいて平行に走る2条の竪掘りの溝の間は、地山がやや高く残されたもので、発掘地域南部を東西に(488)走り、中央付近で北折(505)してゐる。この南築地(488)の西端に近く、東西に3mの間隔をおく2柱穴とその南北に配された雨島石状石列からなる門SB 489が検出された。また、西築地(505)の南から約23mのところまで、築地を横断する暗渠中から長さ約2.8mの断面U字形の木樋が発見された。南築地の南溝は、西築地SA 505の西溝と合流して、さらに西へのび、発掘地西端にまで達する。築地SA 488の南約7mに東西の柱穴列(柱間各3m)がある。この柱列は、推定「オ二次内裏」の北をかき、築地回廊の北辺凝灰岩雨落溝から北27mの位置にあたる。

以上が今回の調査で検出した遺構の概略であるが、これら遺構は、苑池SG 500と、埋没後その上に造営されたものとに大別され、後者はさらにSB 501とSB 502の二期に分けることができる。築地SA 505・488は、この二期を通じて存したものとおもわれる。このSB 501と築地の造営は、出土遺物特に瓦類からみて、推定「オ二次内裏」の造営と時期を同じくしたと

かわかる。従って、苑池SG 500は「オ二次内裏」以前、造宮にかゝるものである。

出土遺物は、瓦・土器を主としており、特に瓦類の出土は、官衙地区のこれまでの調査

(680区の調査)結果に比して量が多く、軒瓦では、推定「オ二次内裏」で検出されたもの

と同型式のものが多いが、また築地所用と考えられる小型のものも存在が注意された。

土器では、これまでの調査の出土品で最も古いものが、天平宝字末年を前後とするもので

あったのに対し、それよりもやや古い型式の存在が注意された。

出土遺物

鬼瓦

一個

軒丸瓦

三百三十個

軒平瓦

三百十五個

九平瓦

百十三袋

須臾器

六箱

土師器

五箱

ヒシの実等自然遺物

若干

第四次发掘遺構圖

